ラディカルな政治のスタイル
――ローティ、ライシュ、アンガー――

有賀　誠

第一章　希望の党派でなくなった左翼――R・ローティの不満――
第二章　ますます分断化される社会――R・ライシュの診断――
第三章　民主主義的実験主義に向かって――R・アンガーの希望――

第一章　希望の党派でなくなった左翼――R・ローティの不満――

A・ギデンズは、『左と右を超えて』の冒頭に、「今日、政治的にラディカルであることは、いったい何を意味するのだろうか」（ギデンズ　1994＝2002：11）という問いを置いている。この問いの背景となっているのは、右翼と左翼の間に生じた皮肉な役割の交代劇である。

従来、ラディカルな政治思想とは、資本主義体制の変革を目標に掲げる社会主義思想そのものであった。しかし、とりわけ八〇年代以降、状況は明らかに変化している。いまや、西欧先進諸国で一定の実現を見た福祉国家

体制を守ろうとする現状維持のイデオロギーが社会主義（左翼）であり、それに対して、市場の力を信頼する「自由競争資本主義」を掲げ、ソ連の崩壊も追い風にしながら、福祉国家の問い直しを強力に推進する現状変革のイデオロギー――サッチャリズムやレーガノミックスがそうであったように――となっているのが保守主義（右翼）なのである。

E・バークを引くまでもなく、ラディカルな変化に対する懐疑こそが保守主義のメルクマールであったことを考えれば、これは確かに奇妙な事態ではある。しかし、現代の保守主義は、いまや、福祉国家を「甘やかし国家」と断じ、国家の過剰な保護が市民の自発性をスポイルしてしまったことを批判しながら、国家の役割を可能な限り縮減し、市場原理の導入によって競争化、効率化を図ろうとする新自由主義――より正確に言うなら、A・ギャンブルがサッチャリズムに関して分析しているように、市場の自由プラス伝統的権威という矛盾含みの政策パッケージをもったニューライト（ギャンブル　1988＝1990）――へと変貌を遂げているのである。かくして、「ラディカルになった保守主義が、保守的になった社会主義と対峙」（ギデンズ　1994＝2002：12）するという倒錯した構図が生じている。社会主義は、もはや、未来を構想するラディカルな政治哲学としてのポテンシャルを喪失し、「福祉制度の擁護というかなり控えめな任務」（ギデンズ　1994＝2002：13）に自己限定することで、かろうじて延命を図っているというのが、旧来型の左翼に対するギデンズの診断である。

よく知られているように、ギデンズ自身は、国家の再分配政策に過剰な信頼を置く「旧いスタイルの社会民主主義」と市場の資源配分の効率性に過剰な信頼を置く新自由主義の両者――旧左翼と新右翼――を超えたところに「第三の道」を構想しようとしている（カリニコス　2001＝2003：5）のだが、ここでは、ギデンズが旧左翼に見出している問題が、新自由主義の攻勢に対して、有効なオールタナティブを出すことができない構想力の欠如にあるという点だけを確認して、先を急ぐことにしよう。

ところで、R・ローティが、『われわれの国を完成する』や『哲学と社会的希望』といった近著で描き出している旧左翼ならぬ新左翼の閉塞状況は、先に見たギデンズの議論と重ね合わせてみると、相互補完的な意味合いをもっており――イギリスとアメリカというコンテクストの差異を、完全に見過ごすわけにはいかないとしても――、併せて、左翼退潮の過不足のない原因分析を形成していると言えるのではないだろうか。

ローティの定義によれば、「右翼」とは、「国家は基本的によい状態にあり、過去のほうがもっとずっとよかったかもしれない」と考える党派である。これに対して、「左翼」は、「希望の党派」であり、もっぱら「私たちの国家はまだ完成されていない」（ローティ　1998＝2000：14）ことを主張する。とすれば、左翼が、国家をより良くしてゆこうとする意欲を失い、「傍観者になり、回顧的になる」とすれば、左翼は「左翼」でなくなってしまうはずなのだが、現在、アメリカで生じているのは、まさしくそのような事態である、とローティは診断している。では、なぜそうなってしまったのか。ローティが挙げる主要な原因は、六〇年代以降、とりわけアカデミズムのなかで顕著になった「文化左翼」（フーコー派左翼、ルサンチマン学派）の台頭である。

文化左翼の特徴を、ローティは、彼が「健全」であったと評価する一九〇〇年から一九六四年までの「改良主義的左翼」――ローティは、より一般的な「旧左翼」という呼称に換えて、「弱者を強者から守るために立憲民主主義の枠組の中で奮闘していたすべてのアメリカ人を包括」（ローティ　1998＝2000：46）する言葉として、この語を用いるよう提案している――と対比することで、ネガティブに特徴づけている（北田　2002：44）。

改良主義的左翼のあり方を、もっともよく体現している人物として、ローティが挙げているのは、W・ホイットマンとJ・デューイである。彼らは、ともに、「人間の手による創作物でないもの、人間を支配する権威を持つものという意味での〈真理〉の存在を拒絶すること」（ローティ　1998＝2000：29）を自らの信条としていた、

とローティは述べている。

デューイの、プラトンの「形而上学」に対する執拗な反対も、実は、同一の信条に発している。プラトンは、人為から自由な、発見されるべき「本性を備えた実在が『向こう側』にあるという観念」（ローティ 1998＝2000：31）を生み出したのだが、ここから、予め存在する実在（客観）を、人間の関心（主観）によって歪めることなく正確に表象することを、真理性の資格として要求する「真理の対応説」が帰結する。しかし、デューイにとっては、知識を実在（現実）を表象しようとする試みであると見なすこの考え方は、放棄されるべき有害な考え方であった。そうではなく、むしろ、われわれのおこなう「探求は現実を使用する一つのやり方として考えられるべきである。だから、真なる信念とそれ以外の世界との関係は表象的というよりは因果的である」（ローティ 1999＝2002：94）。一見、客観的表象と思われるものも、実は、われわれの社会的必要性と密接に結びついた記述であること、これが、デューイが真理の対応説に置き換えようとする考え方である。

ところで、ローティによれば、真理の対応説を拒絶することで、デューイが望んだのは、政治を真理の支配から解き放つことであった。「哲学の原理」にせよ、「神の命令」にせよ、人間の営為を超えた場所に発見された真理が、何らかの政治のあり方を正当化してくれるという期待を捨て去るようデューイは教えているのである。民主主義とは、「人間以外の権威に服従することを認めず、人間の間で自由に形成される合意だけが権威を持つという見解」（ローティ 1998＝2000：19）と別のものではない。そして、このデューイの見解に、「このアメリカ世界に、それ自身が最終的な権威であり、最終的な信頼であることを分からせるのにどれくらい時間がかかるのだろうか」と嘆いたホイットマンは、完全に同意するはずである。

多様性をもった国民の間で、自発的に形成されてくる合意以外のものに権威を認めない国にとって、民主的討議への参加を制約するカーストや階級といった社会的区分の存在は容認できるものではないだろう。とはいえ、

デューイやホイットマンにとって、カーストも階級もない社会の望ましさは、何らかの合理的な道徳法則との一致によって、哲学的に基礎づけられるというものではない。われわれに言うことができるのは、「その社会が他の社会よりも不必要な苦しみをもたらさないだろうということであり、その社会がある目的、つまりより多様な個人――もっと心が広く、もっと心が豊かで、もっと想像力に富み、もっと勇敢な個人――を創造するという目的を達成する最善の手段である」（ローティ　1998＝2000：32）ということだけなのである。それゆえ、苦しみを減少させること、多様性を増大させること、が目指すべき最重要の政治的目標であることの「論証を求める人々に対しては、デューイもホイットマンも何も言うべきことがない」。

ホイットマンやデューイが推し進めた徹底した「世俗主義」は、アメリカ社会において、大きな成功を収めた。人々の合意を超えた上位の審級を否定することによって、「幸福を求めるわれわれの欲求」を「真理を求めるわれわれの欲求」（ローティ　1999＝2002：311）に――「希望」を「知識」に――優先させることが、左翼の共通の信条として定着したのである。こうして、改良主義的左翼は、マルクスを必要とすることなく、アメリカ社会が抱える極端な不平等という問題の解決に向けて――「私たちの国を完成させる」べく――、着実に「希望の政治」を推進してきたのだ、とローティは考える。

ところが、このような状況は、六〇年代に入って、大きく変化する。改良主義的左翼衰退のもっとも重要な契機となったのは、ベトナム戦争であった。ベトナム戦争は、アメリカという国のアイデンティティに深刻な疑いをもたらし、それまでは、社会の不正義は、立憲民主主義という制度の利用を通じて、漸進的に正すことが可能であるという確信を共有していた「非マルクス主義左翼」を、バラバラに引き裂くことになった。ベトナム戦争の幻滅は、自国をトータルに否定する理論装置としてのマルクス主義の積極的な受容をもたらしたのである。「資本主義は打倒されねばならないと確信している人々だけが左翼と見なされ、それ以外のすべての人々は、弱

虫のリベラルであり、自己欺瞞のブルジョワ改良主義者」（ローティ　1998＝2000：45）であるとされた。左翼（新左翼）とリベラルの間には決定的な境界線が引かれることになったのである。そして、六〇年代の新左翼は、アカデミズムの内部に、その後継者である「文化左翼」を生むことになる。

マルクス主義という「形而上学」の流入と席捲は、アメリカの左翼に、いったいどのような変化をもたらしたのだろうか。ローティは、この変化を、「〈アメリカの左翼〉は、自らが『理論』と呼ぶものに身を委ねて、あまりにも宗教に似たものを手にしてしまった」（ローティ　1998＝2000：102）と評している。ここに生じているのは、「民主主義に対する哲学の優位」という転倒した事態なのである。「政治的見解と理論的な（神学的、形而上学的、認識論的、メタ哲学的な）大問題にかんする見解のあいだには堅い結びつきのあることが望ましい」（ローティ　1999＝2002：70-1）と考えられるようになる。もっとはっきり言えば、政治的選択は、哲学的思索によって、基礎づけられねばならない、というわけだ。しかし、異なった言語ゲームの間に論理的な包摂関係を認めないローティにとっては、政治と哲学の言語ゲームの間に、因果的な作用関係はありえるとしても、政治的構想が何らかの哲学的原理――「無限の責任」（E・レヴィナス）や「社会の不可能性」（E・ラクラウ＋C・ムフ）といった――から、演繹的に導出されるということはありえないのである。

ホイットマンやデューイが力強い表現を与えた「哲学に対する民主主義の優位」の、文化左翼によるこのような逆転は、どのような帰結をもたらしたであろうか。ローティが下しているのは、次のような診断である。「人が政治に係わる方法を哲学的に思索する、こうした無謀な試みは、〈左翼〉が実践主義から後退し、国家の問題に対して傍観者の態度を取る時に生じてくるものの徴候である」（ローティ　1998＝2000：100）。文化左翼は、哲学から政治までを包摂する理論を目指して、抽象化のレベルを高めてきた。そして、そうすることで、現存する秩序に対する批判は、よりラディカルなものになり、トータルにそれを覆す可能性が高まると考えたのであった。

しかし、事態の推移は、むしろ正反対ではなかったか。この上空飛翔的な批判の方向性は、皮肉なことに「自分たちの国を傍観者のように嫌悪感を抱いて嘲笑している〈左翼〉」を生んだのではなかっただろうか。

「傍観者」ではなく、「私たちの国を完成」させようとする「行為者」であること、このためには、自国に対する一定の誇りが必要である――もちろん、過剰な誇りが好戦性を生むことにも、同時に、敏感でなければならないが――と、ローティは主張する。というのも、自尊心をもたない個人が、自らを向上させようとする動機づけを欠いているのと同様に、「国家に対して誇りを持たなくなると、国家の政策について活発で効果的な討議が行われる見込みはなくなる」（ローティ　1998＝2000：2）からである。さらに言うならば、コスモポリタンこそ、まさに愛国者であらねばならない（ローティ自身、各所で、自らがコスモポリタンであることを明言している）。「世界連邦」に国民国家が主権を譲り渡す日は、そのような構想に進んで協力しようとする自国の努力に誇りをもち、支援する国民を欠いては永遠にやって来ないからである。

にもかかわらず、「この〈左翼〉のメンバーたちは、自分たちの国から一歩退き、……自分たちの国を『理論化』する。……現実の政治よりも文化の政治を優先させ、社会的正義にかなうように民主主義の制度が創り直されるかもしれないという、まさにそのような考え方をばかにする。そうして彼らは希望よりも知識を優先させるのである」（ローティ　1998＝2000：38-9）。

例えば、デリダやレヴィナスに依拠しつつ語られる「他者性の政治学」が標的にするのは、経済的問題ではなく、もっぱら考え方――例えば、西欧の家父長的資本主義制度に内在する「男根＝ロゴス中心主義」といった――である。そして、これまで社会的に容認されてきたサディズムの犠牲者を救うべく、他者を承認すること――サディズムを下支えしてきた考え方を改めること――が説かれることになる。文化左翼の関心は、貧困や失業といった金銭の問題ではなく、それ以外の理由で辱められている人々に向けられている。「他者となるためには、

消し去ることのできない汚名を着せられていなければならない、つまりただ単に経済的利己心の犠牲者ではなく、社会的に容認されているサディズムの犠牲者にされる汚名を着せられていなければならない」（ローティ　1998＝2000：86）というわけである。

もちろん、文化左翼がそれなりの成果を収めてきたことを、ローティも無視しているわけではない。長年にわたってアメリカ人が同胞に加えてきた侮辱を理解させようとする何十万もの教師の努力のおかげで、アメリカ社会のサディズムは、確実に減少してきた。「〈六〇年代〉以来、アメリカの法律はほとんど改善されなかった」が、「教育ある男性が女性について語る口調、教育ある白人が黒人について語る口調は、〈六〇年代〉以前とずいぶん異なって」（ローティ　1998＝2000：86）きているのである。

しかし、侮辱の問題――考え方の問題――への関心の集中は、金銭の問題――再分配の問題――の無視を伴っていたと、ローティは述べる。実際、「社会的に容認されてきたサディズムが着実に減少していったのと同じ時期に、経済的不平等と経済的不安が着実に増加していった」（ローティ　1998＝2000：88）のである。そして、このことは、必ずしも偶然ではない。

改良主義的左翼は、抑圧されてきた少数派の問題を、アメリカ人としての共通性――同胞として尊重し合えること、お互いのつきあいのなかで他者性が気にならなくなること――を宣言することを通じて、克服しようとしてきた。これに対して、文化左翼は、相違を認めた上で互いに尊敬し合う――他者性を存続させる――必要があるので、「アメリカがるつぼであってはならないと主張している」（ローティ　1998＝2000：107）。しかし、「共通性のレトリックのみが総選挙で勝利を収める多数派を創り出すことができる」のだから、共通性の拒絶は、政治的には大きな不幸――法律には何の影響も与えることができず、経済的不平等に有効な対処法を示せないこと――をもたらしてしまうのである。

先に言及しておいた理論的抽象化への惑溺が、傍観者性を強化してしまうという論点についても、いま少し敷衍しておくことにしよう。ローティが槍玉に挙げるのは、例えば、福祉国家における再分配のような経済的不平等の是正を目指すリベラルな理念が、実は、規律＝訓練の権力装置としての機能を担ってきたことを暴露し、その陥穽を指摘するといったフーコー流の議論――あるいは、ボランティアに代表される「主体性」や「自発性」の賞揚は、主体がシステムから自立したものではないことを隠蔽し、実際には、システム動員に加担してしまうといった議論（中野　2001：260）も同種のものと考えてよいだろうか――のスタイルである。この種の議論の鍵概念となっているのは、言うまでもなく、「権力」であるのだが、それは、「私たちの言語に含まれるすべての言葉と私たちの社会にあるすべての制度に消し去ることのできない染みを残してきている作用を意味」（ローティ　1998＝2000：101）している。つまり、権力は、「機転の利く幽霊のように消えそうで消え」ず、つねにすでに、そこに存在しているのである。あらゆるものは権力に汚染されているのだから、われわれとしては、どのような営為も所詮その汚染を回避できないということに半ば絶望しつつ、高みから冷笑的に眺める――あるいは、果てしなく自己分析を続ける――ほかない。かくして、「どんなことでも嘲笑できるが、何も希望できず、すべてのことを説明できるが、何ごとにも心酔できない」と、H・ブルームが的確に表現した状態が生じることになる。新しい社会的実験の企ては、立案される前から、自らの権力性に無自覚な「信頼できない自由主義的『ヒューマニズム』の徴候」（ローティ　1998＝2000：40）を示すものとして、早々に却下されてしまうのである。

かつてニーチェは、神や人権を、人間を超越した何ものかに祭り上げようとする道徳家の迷妄が、実は、「弱者が強者から自分を守るためにでっち上げた計略」であることを暴露した。形而上学者なら、神や人権に「合理的な基礎」があることを論証して、ニーチェに反論しようとするだろうし、フーコー派左翼ならば、ニーチェ風

の暴露を様々な観念に関して巧みに反復してみせるだろう（こうしたフーコー派左翼の一見ラディカルな姿勢を、ローティは辛辣にも、次のように評している。彼らは、「まさに政府の黒幕が期待している〈左翼〉であり、そのメンバーが現状を暴露することに忙殺されているので、より良い未来を創造するためのいかなる法案を通過させる必要があるのか議論する暇のない〈左翼〉である」（ローティ　1998＝2000：153）と）。このいずれをも排して、「プラグマティストは、計略だからといって何も悪いことはないと返答する」（ローティ　1999＝2002：173）。権力の外――あるいは、システムの外――を無邪気に希求することはできないとしても、そのような認識は、必然的に傍観者の道へと繋がっているわけではない。むしろ、ニーチェが示そうとしていたのは、正反対の道、つまり、「結局なにをやっても逃れられないのなら、やるっきゃない」（宮台＋宮崎　2003：171）という道ではなかっただろうか。

われわれは、第三章で、R・アンガーの近年の仕事を、ローティの言う「文化左翼」への退落と、ギデンズの言う新自由主義の行き過ぎに対する単なる補正的役割への退却をともに回避し、「より良い未来」（ローティ　1999＝2002：85）に向かう構想力に溢れたビジョンの提示を志向する左翼のひとつのモデル・ケースとして位置づけたいと考えている。しかし、その前に、いささかの迂回路を採り、ローティも指摘していた再分配の問題の軽視が、アメリカの分断をどのように深刻化しているのかを、鮮やかなロジックで解明し、おそらくローティならば、改良主義的左翼の伝統の良き継承者と見なすであろうR・ライシュ――実際、ローティは、ジョン・ガルブレイスやジョン・アダムス、ジェシー・ジャクソンらと並べて、ライシュを、百年後には「社会正義の運動を推し進めたことで思い起こされることになるだろう」（ローティ　1998＝2000：48）と評している――の議論を駆け足で瞥見しておくことにしたい。

第二章　ますます分断化される社会――R・ライシュの診断――

R・ライシュは、優れた政治経済学者であると同時に、クリントン政権の第一期に労働長官を務めた敏腕の実務家でもある。在任中には、アメリカ経済の競争力の強化を目指すとともに、公的資金を高い教育を受けた労働者の育成に投入するといった政策提言をおこなっている（カリニコス　2001＝2003：42）。このような提言の背景をなしているのは、ライシュがアメリカ社会に見出した最大の問題――すなわち、社会的不平等の加速化――であった。では、何がこの不平等の拡大をもたらしているのだろうか。

ライシュによれば、「かつてアメリカ人はみな同じ船に乗っていた。彼らの雇用主である企業、それらの企業が属する産業、さらに国民経済が全体としてより生産力を高めていくか、それとも衰退していくかによって、大多数の人々が運命を共にした」（ライシュ　1991＝1991：287-8）。国民経済は強固な一体性を保っており、個人の幸福は、中核企業の成功、国家の繁栄と分かちがたく結ばれていたのである。というのも、国民経済は、システムとしてのある内在的論理を有していたからである。すなわち、中核企業は、大量生産方式による規模の経済を利用して生産コストを削減する。収益は、新たな設備投資へと向けられるが、それだけでなく、同時に、労働者にも相当量が分配される。こうして低所得者の購買力が増大することで、結果的に、すべての人にとって市場が大きくなるというわけである。「巨大企業、巨大労働組合および大衆は、より大きな規模の効率性を得るために大量生産を促進するために協力する」（ライシュ　1991＝1991：91-2）。かくして、この「国民的な約束事」とも言える仕組みは、平等を、かつての帝国主義のような「外国市場の支配に頼ることなしに達成」することに成功した。十九世紀半ばのアメリカを旅したA・トクヴィルは、アメリカでは、愛国心が「啓発された自己利益」から引き出されていることに驚嘆しているが、「同胞の市民が豊かになり、生産力が増せば増すほど、こちらが提供

るものと引き換えに彼らが与えてくれるものが増え、われわれは恩恵を受け」（ライシュ　1991＝1991：415）るという洞察が、この時代には十分な現実性をもっていたのである。

しかし、グローバル・エコノミーの拡大は、このようなイメージ――同じ船に乗り合わせている国民という――が成立する条件を吹き飛ばしてしまった、とライシュは考える。現在では、すでに、製品の多くが明確な国籍をもつものではなくなっているが、それは、「多くの離れた地域で効率的に大量生産できるし、多くの地域の顧客のニーズに応えるためにあらゆる方法を組み合わせることもできる。知的資本と金融資本はどこからでも引きだせるし、必要な時にいつでも手に入る」（ライシュ　1991＝1991：153）からである。このことは、もはや企業の国籍が、その国との特別な結びつきを失っていることを意味している。企業の組織網が蜘蛛の巣のように地球上に張り巡らされている状態を、ライシュは「グローバル・ウェブ」と呼んでいるが、「アメリカ企業がますます海外で生産したり調達したり、一方で外国人所有の企業がますます米国で生産したり調達したりするにつれて、いずれのグローバル・ウェブも、名目上の国籍があるにもかかわらずお互いに似通った存在になっている」（ライシュ　1991＝1991：179）のである。それゆえ、もはや、アメリカ人の経済的豊かさの決定因となるのは、アメリカ企業――あるいは、国民経済――の強さや収益性の高さではなく、個々のアメリカ人がおこなう仕事それ自体――個々人が、その技術や洞察で、グローバル・エコノミーに付け加えることのできる価値――になりつつある。「アメリカ人全体が一つの大きな船に乗っているかのように、すべての人が等しく浮き沈みすることはありえない。アメリカ人は、次第に、別々の小さな船に分かれて乗る運命にある」（ライシュ　1991＝1991：239）と言わねばならないのである。

ライシュは、従来の職業区分――「専門経営者」、「サービス職」、「運輸・運搬職」といった――に代えて、付加価値を基準にした三つの職業区分を提案している。「ルティーン生産サービス」、「対人サービス」、「シンボル

分析サービス」がそれであるが、このそれぞれに属する人々が、グローバル・エコノミーのなかで、それぞれ異なった競争の場をもっているのである。ルティーン生産サービスは、繰り返しの単純作業によって、製品を生産する職種である。対人サービスは、例えば、ウエーターやホテル従業員、介護者などがそれに当たるが、人間に対して直接供給されるサービスであるため、国際的な取引には馴染まない。シンボル分析サービスは、各種のシンボル――言語、音声、映像など――を操作することを通して、「問題発見」、「戦略的媒介」、「問題解決」に当たる人々によって担われる。各種コンサルタント業やヘッドハンター、ジャーナリスト、映画監督などがその代表的な事例と言えるだろう。前二者は、規格化されたモノやサービスの生産、提供を担っており、そのため、賃金は労働時間や仕事量によって測られるのに対し、シンボリック・アナリストの収入は、「仕事の質や独創性、頭の良さ、そして場合によっては問題解決の早さによって決まる」（ライシュ　1991＝1991：246）。そして、ライシュによれば、われわれは、現在、この職業区分に基づいて、「別々の船に分かれて乗っているのであり、第一の船は急速に沈もうとしており、第二の船はゆっくりと沈みつつあるが、第三の船は着実に浮上しつつある」（ライシュ　1991＝1991：288）のである。なぜだろうか。

アメリカのルティーン労働者は、いまや、はるかに安い賃金で喜んで働く世界中のルティーン労働者と競争しなければならなくなった。グローバル・ウェッブが出現した結果、企業はコスト・ダウンを求めて、世界中のどこへでも近代的な工場を設置することが可能になったからである。さらに、ルティーン労働者の賃金が過度に抑制されれば、商品の購買力をも国民経済全体から奪ってしまうことになるといったかつて成立していた関係が、アメリカ企業が、商品やサービスを世界中で販売することが可能な現在ではうまく働かなくなっていることも、彼らの苦境に追い討ちをかけている。

対人サービス労働者は、人に直接提供されるというサービスの性質上、グローバルな競争の直接的な影響を免

れてはいる。とはいえ、対人サービス労働者の生活水準は、彼らがサービスを提供するアメリカ人の生活水準に従属している。なぜなら、「世界中で働くアメリカ人が、その活動を通じてアメリカ以外の世界から恵まれた報酬を受け取れば受け取るほど、彼らは対人サービスに気前よく金を注ぎこむからである」（ライシュ　1991＝1991：300）。

ルティーン労働者や対人サービス労働者に比べて、シンボリック・アナリストは、極めて有利な立場にある。というのも、収益性の高い高付加価値型企業においては、企業の価値それ自体が、蜘蛛の巣状の組織に価値を付け加える問題発見者、戦略的媒介者、問題解決者の能力――人的資本――に決定的に依存しているからである。それゆえ、「高付加価値型企業においては、ルティーン生産の労働者と金融資本家の要求は、新たな問題を解決し、発見し、媒介する人々の要求に比べて、次第に軽視されるようになった」（ライシュ　1991＝1991：142）。とりわけ、先進国においては、ルティーン労働者の賃金が圧縮されていくのと反比例するように、シンボリック・アナリストは高給を手にするようになっている。

五〇年代から六〇年代にかけて、アメリカ社会の所得分布は、中位所得者がもっとも多く、最富裕層も、最貧困層も少数だった。しかし、七〇年代半ばから分極化の傾向が始まり、最貧困層の所得比率が激減すると同時に、中位所得者のシェアも落ち込んでいる。かくして、「金持ちと中間層は、今や別々の世界に暮らしており、そして貧しい者は両者にとってほとんど見えない存在になってきている。二〇世紀の終わりにはアメリカの世帯の最も豊かな一％を占める二七〇万人たらずの人が、税引後所得で、最低所得層の一億人分に匹敵するお金を持つようになった」（ライシュ　2000＝2002：165）のである。

ここで注目しておく必要があるのは、この所得格差の拡大が、教育水準と密接なかかわりをもっているという点である。シンボリック・アナリストとなるのに必要な基礎的訓練――抽象化、体系的思考、実験、共同作業の

四つのテクニックを修得するための――は、最高の教育機関で、恵まれたごく一部の若者に対して、提供されている。「これに、教育に関心を持ち、進学に熱心な親たち、行き届いた健康管理、絵画や音楽の鑑賞、……シンボル分析の素養を持つ両親たちが喜んで与えそうな、さまざまな文化的、教育的アイテムが付け加えられれば、この恵まれた少数の子供たちの教育は、これから開かれる世界への準備として申し分のない先例となる」（ライシュ　1991＝1991：321-2）。ここに出来上がっているのは、見事に閉ざされたシンボリック・アナリスト再生産のサイクルである。

ライシュは、このような所得格差の拡大とその固定化に対して、以下のようないくつかの処方箋を提案している。①七〇年代後半と八〇年代の税制改革によって崩壊した累進課税を、税の抜け穴をきちんと塞いだ上で、再構築すること。②才能に恵まれた子供が、その出自とは無関係に、シンボリック・アナリストになれる道を保証すること。③ルティーン生産や対人サービスに、例えば、コンピューターの導入によって、シンボル分析を応用すること。④「社会的に独立した、生産的な人間になるための必要条件」の多くを欠いている長期的貧困層が利用しやすい職業訓練プログラムを設置すること。

ところで、これらの処方箋を実現するための費用負担は、最富裕層を占めるシンボリック・アナリストからの拠出に待たねばならないのだが、問題を厄介なものにしているのは、この拠出を支えるはずの社会的連帯感――かつては、同情心に訴えるまでもなく、トクヴィルの言う「啓発された自己利益」から見て、経済的相互依存関係の存在は現実のものであった――が、今日、ますます希薄化しつつあるという事態である。というのも、「最富裕層は、その専門技術によってグローバル市場で稼ぐ機会が多くなり、他のアメリカ人の生活水準が低下しているにもかかわらず、自分自身や子供たちの生活水準を維持し向上させることが可能になっている」（ライシュ

1991＝1991：347）からである。シンボリック・アナリストは、他のアメリカ人にほとんど依存することがなくなってしまっている。このため、むしろ、進行しているのは、「成功者の分離独立」であり、同種の人々だけが固まって住む「飛び地（エンクレーヴ）」の形成である。もっとも、シンボリック・アナリストたちも、公共投資のために自分たちの所得から拠出することそれ自体に反対しているわけではないのだが、所得に応じた棲み分けの進行は、その公共投資が、恵まれない人々への再分配ではなく、同じ恵まれた境遇の人々の生活の向上に使われることを可能にしてしまっているのである。しかも、この選別メカニズムは、近年、より下位の経済階層にまで拡張しつつある。「門で閉ざされたコミュニティは、かつてはものすごい金持ちだけのものであったが、今では中流層の住宅購入者もそこに入りたがっている。……中層中流所得層世帯と下層中流所得層世帯との分離は、アメリカを人種的に差別された社会へと引き戻しつつある。黒人の生徒が白人の旧友を持つ確率は一九九〇年代の間中ずっと落ち込んでいる」（ライシュ　2000＝2002：321）のが現状である。

A・ブラインダーは、『ハードヘッド&ソフトハート』のなかで、望ましい経済政策が立案されるために必要なのは、ハードヘッド（冷徹な頭脳）とソフトハート（温かい心）の組み合わせであると述べている。ハードヘッドは、「多いことは少ないことより良い」という原理に従って、効率性が追求されるべきことを意味している。他方、ソフトハートは、「貧しい者は富める者よりも多くを必要としている」という原理に従って、「税や所得移転が市場機構を損なうほどに勤労意欲を喪失させることがないかぎり」（ブラインダー　1987＝1988：60）、社会全体の福利を増進させるために、社会的弱者に対する扶助が要請されるという「衡平の原理」を意味している。この見方からすれば、伝統的な共和党の政策は、市場システムが効率的な資源の配分に寄与することをよく理解し、合理的な経済計算に長けてはいるのだが、弱者に対する同情心に欠けて――ハードヘッド＋ハードハート――い

る。他方、民主党の政策は、「思いやりに満ちたソフトハートに基づくものではあるが、理屈抜きのソフトヘッドによって具体化されがち」（ブラインダー　1987＝1988：35）だということになるだろう。ブラインダーは、共和党の合理的な経済計算と民主党の同情心を結合させる必要性を主張し、「自由市場の良さを十分に尊重しながらも、それが後方に取り残した人びとにも十分な配慮を施す」（ブラインダー　1987＝1988：34）という基本精神を備えた哲学を「リベラリズム」と呼んでいる。

「カーター大統領とクリントン大統領の政権下で、〈民主党〉は、労働組合から遠ざかり、富の再分配を話題にしなくなり、『中道』と呼ばれる不毛の真空地帯へ移」（ローティ　1998＝2000：92-3）ったというローティの現状認識からすれば、グローバル・エコノミーが進展するなかで、経済的不平等の問題から目を逸らすことなく、その帰結を鋭利に分析して見せたライシュの議論は、「強者による弱者の虐待を、特に人種差別が経済的不公平の副産物にほかならないことを明らかにしよう」（ローティ　1998＝2000：81）としてきた改良主義的左翼の良き伝統を現代に引き継ぐものと評価できるかもしれない。しかし、それは、なおブラインダーの言うリベラリズムの思考枠組みに、捕らわれたままなのではないだろうか。つまり、市場競争がもたらす経済的不平等に対する矯正装置として社会的連帯感の必要性が説かれてはいるのだが、連帯感の源泉がもはや枯渇してしまっているとすれば、競争と連帯という二つのモメントは、二律背反的に並置されたままであるように思われるのである。

次章で、われわれが、アンガーの議論に目を向けるのは、彼が、このような袋小路を、市場の民主化というラディカルな構想を掲げながら乗り越えようとしているからである。

第三章　民主主義的実験主義に向かって――R・アンガーの希望――

C・ウェストによれば、R・アンガーもその重要な担い手の一人である「批判的法学研究」は、「学問領域において支配的な合理性の形態……が、いかに価値関与的、イデオロギー負荷的、歴史的に偶然のものであるかを示そうと試みている」（West 1993：198）。リベラルの伝統は、法が、権力の汚染を免れた中立性を主張しうる領域であると想定してきたが、これに対して、批判的法学研究は、「リベラルの視座が、自らの仮定や前提によって強化された盲目性や沈黙のために、自分自身に対してどの程度正直でありえないか」（West 1993：218）、より具体的に言えば、法実践の形成や施行が、階級的、人種的、家父長制的支配といったものから、いかに影響を受けているか、に焦点を当てようとしているのである。そのメタ制度的な探求は、「歪曲のない対話や強制のない知的交換のために必要な条件を充足するべき学問領域の能力」（West 1993：197）に、強力な懐疑の矢を放とうとするものであると性格づけておくことができる。

その意味では、批判的法学研究は、「『権力』を目に見えずに偏在している悪意ある存在の名として採用」（ローティ 1998＝2000：110）し、「すべての『構造や権力の言説』（われわれが、普通、『諸制度』と呼んでいるもののフーコー的表現）と手を切る傾向にある」（Rorty 1988：32）としてローティが厳しく批判する文化左翼と共通の志向性をもっている。実際、批判的法学研究に好意的なウェストも、その重大な欠陥として、リベラリズムを権力の単なる覆いとして記述し、その一切をお払い箱にしてしまう傾向を指摘しているのである（West 1993：200）。

アンガーは、確かに、このような傾向をもつ批判的法学研究運動を主導してきた重要人物の一人である。しかし、彼がわれわれにとって極めて興味深いのは、文化左翼が――そして、批判的法学研究が――総じてロマン主

義を嘲笑するのに対して、「過去よりも、むしろ未来に向かう方向性――すなわち、希望――」（Rorty 1988：31）を維持し、より良い未来を目指してオールタナティブな制度構想――新しい社会的実験の立案――を弛まず提出し続けているという点なのである。

アンガーが、理論家を二つの類型に区別していたことを思い出しておこう（Unger 1987：165-9）。社会的現実の複雑性を強引に縮減し、理論的一般化を産み出そうとする――例えば、マルクス主義――のが、「スーパー理論家」である。これに対して、「ウルトラ理論家」は、流動的な社会的現実の諸特徴、諸側面を保存するために、広範な理論体系を拒絶――説明的、規範的理論の構築を回避するグラムシやフーコーは、こちらの類型に当てはまる――しようとする。後者の前者に対する批判には、確かに、一定の正当性があると言わなければならない。しかし、ウルトラ理論家も、実は、「あらゆる理論体系のなかに深層構造の論理を見出し、説明のための一般化を認識論的な基礎づけ主義と混同し、唯名論的な形態の慣習的な社会科学に退歩する危険を冒している」（West 1987：262）のである。あらゆる理論体系の拒絶は、結局のところ、実効性のある解放の思想や実践を予め不能化してしまうのではないか。それゆえ、アンガーは、慣習的な社会科学への退落――実証主義――も、深層構造の論理の罠――必然性の名において、歴史過程に一定のシナリオを押しつけるマルクス主義の「制度的、構造的フェティシズム」――も、ともに回避しようとするプラグマティックなスーパー理論家として振舞おうとするのである。

アンガーにとって、理論は、それ自体が実践の一形態であることに注意しておく必要がある（Unger 2002b：9）。「すべては政治である」というよく知られたアンガーのスローガンは、「一切は社会的構築である」（ローティ 1999＝2002：116）というローティが掲げるプラグマティズムのスローガンと、実際には、同じことを語っている。デューイの哲学が、「すべてのことを世俗化し、何ごとも固定されたままにしておかない体系的試み」（ロ

ーティ 19982000：21）であったように、アンガーも「社会生活の形成的コンテクスト……、あるいは、問題解決や利害の調停の手続き的枠組み……を、凝固した政治と見な」（Unger 1987：145）している。この「凝固した政治」が、ある社会生活の形式――あるいは、お馴染みの言語ゲーム――を不可避なものに見せてしまうのである。アンガーにとって、理論とは、凝固した政治を解きほぐす役割――「行為の規範や制度化された組織からの逸脱が、新たな社会の組織形態の基礎として役立ちうる道を指摘することで、実践の教訓を展開する」（West 1993：211）役割――を担っている。

凝固した政治を拒絶するアンガーの徹底した「反自然主義」の「背景」――「基礎」ではなく、クワインの言う全体論を構成するひとつの背景――には、実は、ある人間像が置かれている。アンガーは、次のように述べている。確かに、「われわれが打ち立て、そこに住まう制度的、言説的構造は、われわれが何者であるかを形作っている」（Unger 2002a：8）。しかし、「われわれのなかには、つねに、われわれのコンテクストのなかにある以上のものがある。コンテクストは有限である。それに比して、われわれはそうではない」（Unger 1998：9）。それゆえ、アンガーにとって、われわれの洞察や経験、情念、創意を汲み尽くし、われわれを包摂しうるような最終的な社会や言説のコンテクストはありえないのである。ローティは、デューイの人間像が、「人間は時代と場所の子であり、その可塑性には形而上学的ないし生物学的な限界がない」（ローティ 1999＝2002：64）とする見解を含んでいたと述べているが、アンガーのプロジェクトにとっても可塑性――つねにすでになんらかのコンテクストのなかにあるが、同時に、コンテクストそれ自体を再形成する人間の力能――は、決定的な重要な役割を果たしている。アンガーは、この可塑性を制度化し、「われわれのコンテクスト超越能力をより支援するような制度的、文化的世界を構築することによって、環境と人格の間の不均衡を縮小」（Unger 1998：9）しようとするのである。可塑化された社会では、コンテクストのなかでの通常の改訂とコンテクストそれ自体の革命的改訂

の間の区別――社会構造のなかで行為することと社会構造について決定することの間の差異――は、最小化される。こうして一切の社会構造が、凝固したものから可塑化したものへと転換される。しかし、注意しなければならないのは、アンガーにおいては、改訂がより容易な構造は、あくまで「個人的にも、集団的にも、われわれの力能を高める手助けをする」(Unger 1987：5) ために必要とされているということである。言い換えれば、「可塑性が推奨されるのは、それが民主主義的に行為する社会の能力を増大させるから」(Lessig 1989：1180) なのである。

可塑性の強調は、アンガーが提起するオールタナティブな制度構想にも一定の性格を付与することになる。アンガーは、繰り返し、オールタナティブが青写真ではなく、一定の方向性を示唆するものであることを明言している。いわば、それは、未来社会の直接的な記述ではなく、ある種の統制的理念として役立てられることを企図しているのである。その意味で、アンガーは、確かに、素朴なユートピア主義者ではありえない。しかし、同時に、強調しておかねばならないのは、アンガーにとって、ユートピア主義は、依然として真正な現実主義の核心にあるということである。「われわれは、現実主義者になるために、幻視者でなくてはならない」(Unger 1998：74) といういささか逆説的なアンガーの言葉は、彼が現実主義／理想主義の二元論それ自体を拒絶していることをよく示している。

近年のアンガーの関心は、「ポスト福祉国家の民主政治」とでも呼ぶべきものの概略を描き出すことに向けられている。それが、ポスト福祉国家であるのは、アンガーが、新自由主義の席捲に対する社会民主主義の応答にまったく満足していないからである（しかし、同時に、それが、ポスト福祉国家であるのは、アンガーが、福祉国家の基本的な目標であった平等の推進や個人の自律は、手放してはならないと考えているからである）。アンガーによれ

ば、社会民主主義者の手持ちのプログラムは、実際には、「不満つきの新自由主義のプログラム」（Unger 1998：53）にほかならない。つまり、それが求めているのは、「唯一の正しい道を、自由と繁栄への途上で苦しむ人々にとって、できるだけ残酷なものでないようにすること」――すなわち、「不可避なものの人道化」（Unger＋West 1998：3）――なのである。期待されているのは、すでにわれわれがブラインダーの議論に見出しておいた市場の効率性を社会の良心と接合することである。結局のところ、「制度的に保守的な社会民主主義は、新自由主義のビジョンの不可欠の部分」（Unger 1998：54）になってしまっている。かくして、社会的想像力の衰弱こそ、現代の病の根幹であると考えるアンガーは、ラディカルなオールタナティブの展開へと乗り出すのである。

アンガーは、彼の提起するプログラムの根本精神を「力能（エンパワーメント）の増大を連帯と結びつけること」（Unger 2002b：1）と表現している。個人的にも、集団的にも、われわれの力能を増大させると同時に、われわれを結びつける方法を発見すること、これが、アンガーが自らに課した課題である。アンガーのプログラムは、この根本精神へと収斂し、相互に関連し合ったいくつかの柱から構成されている（Unger 2002a：5-7）。①イノベイション、独創性、新たな商品の生産を促進し、財政支援すること。「株式市場は、生産的な投資に向けられる貯蓄の支柱と想定されてきた。しかし、実際には、それらは、標準的な財政理論が信じさせようとしている以上にカジノに似ている」（Unger 1998：61）。貯蓄と生産的投資の乖離を防ぐため、貯蓄レベルの強制的な向上が図られるとともに、例えば、準-公的なベンチャー・キャピタル基金のようなイノベイション促進へ向けた回路の創設が必要である。②人々が自律した労働者や市民として行為するための身支度が確実に与えられること。アンガーは、富と権力の世代間継承を許す私的相続権を「社会的相続権」に置き換えるという大胆な提案をおこなっている。「すべての市民は、社会から、その人生のターニング・ポイントにおいて、高等教育を受けたり、家族を形成し

たり、ビジネスを始めたりするのに利用できるような最小限の原資を、基金として相続すべきである」(Unger＋Salinas　1999：14)。また、現行の労働運動が往々にしてそうであるように、地位を権利に転化することによって、インサイダー――資本と知識に恵まれた領域に職をもつ組織された労働者――とアウトサイダー――資本も知識も貧しい領域に職をもつ不安定な労働者――の分断を固定化することは決して許されるべきではない（アンガーは、政治経済において、前衛と後衛の分断を克服する以上に重要な課題はないと繰り返し述べている）。「人々に現在の仕事への在職権のようなものを与える代わりに、われわれは、変化の渦中にあって、成長するための手段を保障すべきなのである」(Unger＋West　1998：25)。そのためには、例えば、技能訓練センターのような労働者の能力を高める制度的工夫が必要となるだろう。③市場を民主化すること。市場の民主化は、市場を規制することでも、事後的な移転によって不平等を補填することでもない。それが意味しているのは、資本や知識の配分や交換の新たな形態を見出し、生産資源、機会へのアクセスを根本的に分権化することである。そのために、アンガーは、前述のベンチャー・キャピタル基金や、あるいは、技術支援センターといった手段を提案している。④ケアを、そして、その生産システムとの結合を発展させること。原則的に、すべての人は、ケアと生産システムの両方に場所をもつべきである。これは、「家族という枠を超えて、人々をお互いの人生に関与させるかたちで、実践的な社会的連帯の組織化を確かなものにする」(Unger　2002a：7)ことを目的としている。⑤高度のエネルギーを維持する民主制を発展させること。新自由主義者は、人々が力を発揮するためには、政治は小さくなければならないと考える。しかし、アンガーにとっては、事態は逆であり、「小さな政治は、民主主義の血液を象徴する制度改革を枯渇させることによって、人々を小さくしてしまう」(Unger＋Salinas　1999：30)。アンガーは、「社会における政治的動員の水準は、特定のルールや実践――投票制度、政治における金銭の利用、マスコミュニケイションの手段へのアクセスといったものを支配するルール――に高度に応答的である」

（Unger 1998：66）と考えている。そのようなルールの変更によって活性化された民主主義は、高いレベルの政治的動員を、加速化された改革実験と統合することができるのである。⑥国家とは別に、市民社会が、一定の独立性をもち、組織化されていること。「われわれは、市民社会が、地域や仕事、健康や教育といった共通の利益である議題をめぐって、自らを組織化しやすく」（Unger 2002a：7）することによって、政府から独立した枠組みを構想しなければならない。例えば、子供の教育という問題を考えた場合にも、「衰弱した家族と福祉国家の官僚制とのパートナーシップでは、十分とは言えない」（Unger 1998：67）。それは、コミュニティ組織によっても、バックアップされる必要があるのである。しかし、コミュニティの再生は、ただ連帯を呼びかけるだけで得られるわけではないのだから、そこには、連帯が成長可能な制度的環境の整備――地方政府法、税法などの改革――が伴っていなければならない。

このようなラディカルな改革案を支える「背景」のひとつとして、アンガーが、愛国心に言及していることにも、触れておく必要があるだろう。「あなたの国を理解するためには、あなたは国を愛さなければならない。国を愛するためには、ある意味で、それを受け入れなければならない。しかしながら、あるがままにそれを受け入れることは、国を裏切ることである」（Unger＝West 1989：93）。ローティ同様、アンガーも「忠誠と反逆」（丸山眞男）の逆説的な一致の側に掛け金を積んでいる。

もはや、アンガーのプログラムの各項目を詳細に検討する――あるいは、ギデンズの「第三の道」との異同を吟味する――紙数は残されていないが、左翼が、「ルサンチマン学派」（H・ホワイト）ではなく、希望の党派であるべきだとするなら、アンガーのプロジェクトは、そのような要件を充足するラディカルな政治のひとつのスタイル――ユートピアを大胆に構想しつつ、決してユートピアを完成させない――を示していることは間違いな

いと思われる。

ところで、N・ヘントフは、デューク・エリントンを評したトランペット奏者クラーク・テリーの言葉を、次のように伝えている。「『彼は生命と音楽を同じものと考えていた。両方とも、つねに転生の過程にあるものだと思っていたんだ。だから彼が書いた曲にはエンディングがないんだ。演奏を締め括るにしても、またどこかでそれが始まる余韻をのこすこと、これに彼はこだわっていた』／そう、こうしたものすべてが、ジャズの真骨頂だ」（ヘントフ　2001＝2003：104）。そして、こうしたものすべては、ラディカルな政治のスタイルの真骨頂でもあるのではないだろうか。

参考文献

Blinder, Alan (1987) *Hard heads, Soft Hearts: Tough-Minded Economics for a Just Society*, Addison-Wesley Pub.（佐和隆光訳（1988）『ハードヘッド&ソフトハート』TBSブリタニカ）

Callinicos, Alex (2001) *Against the Third Way: An Anti-Capitalist Critique*, Polity Press.（中谷義和監訳（2003）『第三の道を越えて』日本経済評論社）

Gamble, Andrew (1988) *The Free Economy and the Strong State: The Politics of Thatcherism*, Macmillan.（小笠原欣幸訳（1990）『自由経済と強い国家』みすず書房）

Giddens, Anthony (1994) *Beyond Left and Right: The Future of Radical Politics*, Polity Press.（松尾精文・立松隆介訳（2002）『左派右派を超えて　ラディカルな政治の未来像』而立書房）

Hentoff, Nat (2001) *The Nat Hentoff Reader*, Da Capo Press.（藤永康政訳（2003）『アメリカ、自由の名のもとに』岩波書店）

北田暁大（2001）「政治と／の哲学、そして正義」馬場靖雄編『反＝理論のアクチュアリティー』ナカニシヤ出版

Lessig, Lawrence (1989) *Plastics: Unger and Ackerman on Transformation*, 98 Yale. L.J.

宮台真司＋宮崎哲弥（2003）『ニッポン問題』インフォバーン
三本卓也（2003）「法の支配と不確実性（1）――ロベルト・アンガー「構造」概念の変容とその示唆――」『立命館法学』二八五号
中野敏男（2001）『大塚久雄と丸山眞男　動員、主体、戦争責任』青土社
Reich, Robert (1991) *The Work of Nations*, A. A. Knopf.（中谷巌訳（1991）『ザ・ワーク・オブ・ネーションズ』ダイヤモンド社）
――――(2000) *The Future of Success*, A. A. Knopf.（清家篤訳（2002）『勝者の代償』東洋経済新報社）
Rorty, Richard (1988) *Unger, Castoriadis, and the Romance of a National Future*, 82 NY. U. L. Rev.
――――(1998) *Achieving Our Country*, Harvard University Press.（小澤照彦訳（2000）『アメリカ　未完のプロジェクト』晃洋書房）
――――(1999) *Philosophy and Social Hope*, Penguin Books.（須藤訓任・渡辺啓真訳（2002）『リベラル・ユートピアという希望』岩波書店）
Unger, Roberto (1987) *Social Theory: Its Situation and Its Task*, Cambridge University Press.
――――(1998) *Democracy Realized: The Progressive Alternative*, Verso.
――――＋ West, Cornel (1998) *The Future of American Progressivism: An Initiative for Political and Economic Reform*, Beacon Press.
――――＋ Salinas, Carlos (1999) *The Market Turn without Neoliberalism*, 42 Challenge.
――――(2002a) *The Boutwood Lectures: First Lecture*,
――――(2002b) *The Boutwood Lectures: Second Lecture*,
http://www.law.harvard.edu/faculty/unger/english/newwr.php
渡辺幹雄（1999）『リチャード・ローティ　ポストモダンの魔術師』春秋社
West, Cornel (1987) *Between Deuwy and Gramsci: Unger's Emancipatory Experimentalism*, 81 NW. U. L. Rev.
――――(1993) *Keeping Faith*, Routledge.